

## 平成30年度 第4回東大和市まち・ひと・しごと創生会議 会議要録

- 会議名 第4回東大和市まち・ひと・しごと創生会議  
開催日時 平成31年2月9日（土）午後3時から5時  
開催場所 会議棟 第1会議室  
出席者 （委員）牧瀬委員（座長）、小島委員（副座長）、目黒委員、富田委員、水上委員、三上委員、高橋委員、松本委員（代理）、赤坂委員、斉藤委員、谷津委員（事務局）田代企画財政部長、星野企画財政部副参事、里見政策推進担当係長、慶徳主事
- 会議の公開・非公開 公開 傍聴者数 なし
- 会議次第 1 開会  
2 座長あいさつ  
3 内容  
(1) 東大和市まち・ひと・しごと創生総合戦略の改正について（意見聴取）  
(2) 転入転出者アンケート調査について（報告）  
(3) まち・ひと・しごと創生について

### 会議の結果及び主要な発言

#### (1) 東大和市まち・ひと・しごと創生総合戦略の改正について（意見聴取）

委員：

第3次基本構想とまち・ひと・しごと創生総合戦略との整合を図ることは理解できる。各施策における各事業については、すでに課題をピックアップしているのか。現時点で目標値を超えている事業については、新たに目標値を再設定するのか。あるいは目標値を超えている事業については、あえて目標値はそのまま据え置きとし、目標値に達していない事業に重点的に配分するという方法も考えられるがいかがか。

事務局：

まち・ひと・しごと創生に係る庁内会議においては、例えば、37ページの特色ある公園づくり事業や27ページのブランド商品の商談件数等、現在実績がなく、実質進捗管理を行えてない状況で課題として把握している。

また、すでに目標値を超えている事業については、目標値を延伸という形で再設定し、新しい事業や新たな目標設定は考えていない。

## (2) 転入転出者アンケート調査について

委員：

転入転出者アンケートの調査結果について、子育て世代が転出し、子育て世代が転入しているが、これは東大和市に特化した傾向ではなく、他の自治体についても同じ状況ではないかと感じた。また、転入者と転出者の共通点が非常に多い。転出入の理由が同じく親と同居・近居、単身者の結婚、転勤等だった。未就学児の割合も高い。転出者の東大和市の印象と転入者の東大和市の印象もほぼ同じ傾向にある。東大和市は買い物が便利、自然環境が良い、治安が良い。教育環境は評価が高いようだが、親子で交流するイベントについては良いという評価が少ない。子育て世代は保育所や幼稚園等のハード面だけでなく、親子で交流するイベント等のソフト面での要望も強いと感じた。

一方で、先日見学した個別事案検討チームの報告会で、あるグループの提案では、市民意識調査や各職場での子育て世代ヒアリング調査の結果から交流イベントの事業提案をしている。またあるグループでは教育に関する事業を提案していた。転入転出者アンケートの結果や個別事案検討チームの調査研究は連動してくるよう感じる。アンケートの結果での分析を踏まえて、個別事案検討チームが提案したものをどのように取り入れていくかということにつながっていく。個別事案検討チームの提案も非常に共感できると思った。縦割りではなく、組織横断で、また今後、民間活力、地域資源、政府との連携等、連動して結び付けていけばより良い施策・事業になっていく。

委員：

転入転出者アンケート調査の結果を見ると、東大和市を転入先に選んだ理由が、親族との同居が比較的高い割合であった。自分が市内に引っ越しした理由も親との同居で、この需要が一定数いることが分かった。二世帯住宅用の土地を探すには、40坪以上ないとストレスなく間取りをとることが難しい。でも、40坪以上の土地を探すものの、なかなか見つからなかった経験がある。そこで、例えば、東大和市の二世帯住宅用の土地の販売や見学について、電車広告等に掲載するのはどうか。さらに二世帯住宅用の土地の購入を検討する方に、併せて市内を案内するのも効果が期待できる。

## (3) まち・ひと・しごと創生について

委員：

転入者のアンケートでは自然環境が良いという評価が割合として高かった。一方で、防災の観点では、自然環境の良さは、自然災害の可能性も併せもっている。先日、防災の説明会に参加した。市内の55か所の特別警戒区域を策定する作業をしている。説明会の参加者からは、自分の資産の価値が落ちることへの危機感があった。住んでみて、自然環境も大事だが、一番大事なことは災害が少ないこと。そんな中、今年の出初式の参加者は去年の189名から153名に減員していた。それぞれの価値観もあるが、高齢化社会においては、防災教育の普及、地域との連携、シニア層の活用など、連携して地域を守っていくことが必要と考える。

委員：

資料4における清瀬市との連携事業について、どのような事業なのか。次年度以降まち・ひと・しごと創生にかかる取組において、SDGsはどのように関わってくるのか現状の考えはいかがか。

委員：

東村山市とは連携して平和事業を行い、武蔵村山市とは観光関係で連携事業を行っている。清瀬市は多摩北部に位置し、人口構成が似ており、財政状況も似ている。財政状況が厳しい中でも、持続可能な行政運営を目指し、まち・ひと・しごと創生に取り組んでいる。今住んでいる市民の方が、住み続けてもらえるように、地域の魅力発信に取り組むこととしている。

事務局：

SDGsについては、今後検討していきたい。

委員：

働き方改革で企業も多様性を許容するようになってきている。男性もより子育てに関わるようになっていく。子育て施策の中で、母親同士の交流だけでなく、父親同士の交流という視点はあるのか。また、個別事案検討チームの活動についてだが、今年度の事業化の検討は企画課が行うのか。それとも、個別事案検討チームのメンバーが全く違う独立した組織として、各チームの構成員をリーダーにして事業化する仕組みなのか。

事務局：

男性の子育てにおいては、おやじの会が1つの交流の場になっている。

個別事案検討チームの事業化は、今後企画課が主管課と調整しながら、事業化については、実施の有無も含め検討していく。

委員：

まち・ひと・しごと創生総合戦略の全般に関して、日本一子育てしやすいまちづくりという目標は明確で分かりやすくよい。そのための基本目標1「若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる」と基本目標2「しごとをつくり、安心して働ける環境をつくる」の施策は是非推進していくものであると思う。

基本目標1については、先日個別事案検討チームの報告会で、市内の小学生の学力向上の提案があったが、まさに課題になっていると感じた。もう一つは、物の消費ではなく、「事（こと）の消費」がポイントになる。東大和市は住環境が整っているなので、その良さを活かすためにも事（こと）の消費ができる機会を増やしたら、さらに魅力が増すのではないかな。

基本目標2の仕事の件であるが、創業も大事だが、これからは廃業と事業承継は切っても切れない問題になると思う。廃業ではなく、できるだけ事業承継や転業になるように工夫していくのがよいと思う。また、キャッシュレスが浸透しているので、消費税の増税もあるが、中小の商店等にとって導入はハードルが高いと思うので、補助等の身近な支援も考えてもらえればと思う。

委員：

当店では、食品売り場の改装後、通路が広がったことで、障害者の来店率が高くなった。またベビーカーを押す客も増えた。さらに赤ちゃん相談のコーナーに来る方も増えた。これは、市が進めている施策と連携できるのではないかと感じている。

来店されるお客の声から、子育てと教育への関心が非常に高いと感じる。市と連携して情報提供できる部分があれば協力したい。

また、当店で介護ショップを作ったところ、売り上げが予想以上に良かった。食品から介護商品まで、一度に買える場所として評価があった。同時に介護への関心の高さがうかがえるが、市では介護についてどのように考えているか。

委員：

市としても高齢者の健康寿命を延ばし、平均寿命との差を縮め、地域で安心して住み続けられるようにしていきたい。その一つとして「東大和元気ゆうゆう体操」を広めているが、高齢者に限定するのではなく、イベントや学校でも広く世代を超えて取り組んでもらえるようにしていきたい。

委員：

0歳から小学校低学年の子供がいる親の転入のきっかけになるのは住宅事情、転勤など仕事の事情などやむを得ない事情だが、転入後住み始めて、気になるのは学校教育かと思う。現在仕事で、三鷹、西東京、東村山、東大和、昭島と行っているが、そこに教育の差を感じる。市内においても生徒数により先生の数にも影響があり、地域により教育環境に差があると感じる。

委員：

ふるさと納税は、税金に返礼品をつけるようなもので、そもそも税金は国民の義務という観点からおかしい。10月からの消費税増税についても食品の取扱いによってパーセンテージが異なるなど、悩ましい。社会的には、児童相談所の問題などもあがっている。行政機関の中では、責任を明確化すべきである。

子どもは宝であり、平等に育ててほしい。またシニアの活躍も必要。施策を進めるに当たり、リーダーは見識を新たにしておいてほしい。

委員：

アンケートについて、転出者と転入者について、転出先、転入元を聞いているのならば、政策誘導できる部分が明確になる。

発想を海外に飛ばしてみてもどうか。例えば、海外で現地のメディアやユーチューバーを連れてきて市内を巡らせ、海外で情報発信してもらおう。佐賀の嬉野、茨城の大洗、足利市のフラワーパーク等、日本では知名度が高くないが、海外ではよく知られているケースがある。東大和市の「大和」は日本的で伝統的なものとして海外では思ってもらえるかもしれない。

委員：

8年前に区部から東大和市に転入した。誰も知らない中で、おやじの会や消防団に入って地域のつながりをつくってきた。おかげで、子どもも地元の学校、地域に愛着をもって育っている。地元愛を育てる取組を地道に行っていてほしい。

委員：

「日本一子育てしやすい」は分かりやすいが、様々な市町村でうたっている。家庭の中で母親が子育てを担っている部分が多いのも現実。多様な働き方が社会で提案されている中、来年度予定されているチャレンジショップ・シェアショップを売りにするのも、子育てしやすいまちのアピールにつながるのではないかと思い、期待している。